

福岡大学経済学部 卒業論文

失業と賃金硬直性に関する理論的研究

EE910213 窪田 剛士

March, 1995

1 序章

現在，失業は各国，特にヨーロッパにおいて深刻な問題となっている．それ故に，所得水準の低下による経済的困窮や，心理的な疲弊による治安の悪化など，経済のみならず，政治的な不安定要因となっている．この様なことを未然に防ぐためにも，失業の問題は早急に解決しなければならない問題である．そこで，この論文では，失業についての基本的な定義と現在研究されている諸理論についてサーベイしている．

本文の構成は第2章，第3章と第4章で成り立っている．第2章では，失業を考える上で必要となる失業の概念を定義する．そこでは，摩擦的・構造的・循環的失業，自発的・

非自発的失業，そして自然失業率について定義する．

第3章では，主に，ニュー・ケインジアン理論を説明する．まず第1節では，賃金硬直性の原因を述べる．第2節では，ニュー・ケインジアン理論である，スモール・メニュー・コストと総需要外部性，協働の失敗，ヒステシス理論，労働契約理論，そして効率的賃金仮説を述べる．第3節では，その他の理論として，最低賃金法，労働組合，そして新しい古典派の理論であるリアル・ビジネス・サイクル理論を述べる．そして第4節では，伝統的ケインジアンとニュー・ケインジアンの違いであり，また実質経済と名目的要因とのつながりを重視する考え方として，名目変数と実質変数の重要性を述べる．

そして，最後に，第4章で，この論文の結論を述べている．